

アパルトヘイトに生きるとは

吉田栄一

私「イースタンサバープで家を探しているんですが。」

不動産屋「お名前は何？」

私「エイイチ・ヨシダといいます。」

不動産屋「…」

私「ウォータークルフでなくてもよいのですが…」

不動産屋「ドイツ人ですか？」

私「いいえ、日本人です。」

不動産屋「ああ、ありますよ、デリー通り六四番に。」

私は三年半の南アフリカ共和国滞在中に三度引越した。なぜか、南アの不動産屋は物件の空きを問い合わせると必ずまず姓名を確認する。これは、客の喋るアクセントと名前から「人種」を判断するためである。南ア人は、混血を主とする「カラード」以外はその名字で人種のおおよその見当がつくため、不動産屋は家主の人種選好に適合するかどうか名字を聞いて判断しようとするのである。家探しでは日本人と分かる「白人」扱いはされる場合が多い。

* * *

アパルトヘイト時代の南アには異人種間の悲恋話が多く、小説やドラマ、映画にもなっている。ある映画の中で、白人にか見えないカラード女性が、白人警官と恋

におち、「背徳法」違反の罰から免れるために人種分類の再認定を申請している奇妙なシーンを思い出す。

検査官「あなたは白人として再認定して欲しいとの請求を出していますが、白人の言語を話し、白人地区に生まれ育ち、白人の身体的特徴を兼ね備えていますか？」

女性「はい」

検査官「それでは失礼します。…(鉛筆を女性の長髪にさす)：あなたの髪(の縮れ具合)は明らかに白人のものとは異なります。」

女性「…(無言)…」

私の属した様々な現地コミュニティでも、胸長、短足、大頭の非白人である私を人種分類しようとする試みが様々な場面で展開された。

私「ヒルブロウで車上狙いに車の中を荒らされました。」

警察官(黒人)「名前は何？」

私「エイイチ・ヨシダです。」

警察官「…(暫く考え、黙って被害届の人種区分欄で黒人に○をつける)」

私「…(僕は黒人か?)…」

* * *

友人A(黒人)「おまえら白人に非白人の気持ちに分かるか！」

私「僕は白人じゃないよ。」

友人B(カラード)「そう。カラードだよ。」

私「…(僕はカラードか?)…」

* * *

私はしばらくの滞在を経て、分類と差別は似て非なるものか紙一重か、何れにせよ「人種」など他人が決めればよいと思うようになり、黒人に○をつけた警察官や、カラードと違って味方してくれた友人の、私を南ア社会の一部に位置づけようとしてくれたその態度に親愛の念すら覚えた。非日本人を外人と呼び続け、在日「外国人」をいつまでも別枠に縛っているのがわが同胞であるが、南アの友人は、滞在数カ月後には「もう何カ月もいるの?」じゃあもう南ア人だね」と言ってくれる。その言葉に、差別の中に生きてきた者にしか解らない、人種分類の重みと限界を考え続けた三三〇年の歴史を思い知らされたのである。

法律上の人種分類がなくなっても、南ア人の中に刻まれた人種分類意識が薄まるには、ヤンファンリーベックがケープタウンに上陸して以来三五〇年間で築き上げた「白い」南ア史と同様の年月が必要なのかも知れない。

(よしだ えいいち/地域研究第一報)